

語り合いのシンポジウム交流会2013

第12回 実務者・教育者・研究者の討議の集い2013 in 札幌

主催 シンポジウム世話人会

目次	1. 交流会	1
	2. 討議の集い	1
	3. 寄稿文: 地域防災、日常視点からのまちづくりと教育	2

End=2

【1】 交流会

名称: 学生による語り合いのシンポジウム交流会

日時: 2013年8月31日(土)17:30~19:30

会場: 札幌駅北口前、イタリアスタツィオーネ

参加者25人: 職業人4人、学生21人

様子: 午後のシンポジウム語り合いが、夜の部にも行われた。

夜の部はテーマなしで、人生論、若者論、住まい手の建築など、広範囲に意見を述べ合った。

二次会は13人



会の様相

今回は、4テーブルに、アトランダムに着座して、テーブルごとに自由闊達な語り合いを行った。場所によっては、シルバーとの交流のところもあれば、若者のみのところもあったが、年齢を超え学校を超えて意見交換を行うことが出来た。

例年ですと、まとめをかくようにしていたが、のりにのって記録を残すことを忘れてしまった。今回は並みの盛り上がり方ではなかった。

ごとに企画の様相を今年から変えた。

4. おわりに

今回は、お一方のみの寄稿文で例年に比べ少ない鍵路であったが、その分、コミュニケーションに花が咲いた。皆さん、面白く交流されたことが何事にも変えがたいと思っている。

参加された各位には、記して謝意を表します。

付録 参加者

学生 21人

早稲田大学3人、新潟大学7人、福井大学5人

札幌市立大学1人、ほか

社会人 4人

NPO 地域における知識の結い1人、ダイワハウス1名、青森工業高校1人、田無工業高校1人



二次会の様相

【2】 討議の集い

地域防災、日常視点からのまちづくりと教育 2012.10.20 togashi

1. はじめに 東日本大震災から学んだことは、防災や減災を日常のまちづくりそのものとして考えることである。そこで、防災を特殊な一過性のものと捉えないよう身近な問題の継続と考えたい。ここでは、地震災害を対象として種々の問題を整理し、次につなげる議論を喚起するために、まちづくりと教育について論ずることとした。

2. 問題提起 防災を次のように捉える。地域でどう安心安全を確保していくか。それをどう支えていくのか。また、情報について観察力や判断力に行動力をどう育んでいくべきなのか。社会生活の営みとして捉えていきたいものである。

防災の具体化メニューとしては、耐震化と避難や復興について、平時の住民主体のまちづくりとして、意欲や意識の次元まで含めた地域住民のポテンシャルアップを図るとして、ここでは、防災教育、まちこわし、情報、(建築)構造の問題について扱うことにする。

3. まちづくり **3.1 まちづくり** まちづくりは安心安全で健康的かつ精神的に住民が暮らせるコミュニティづくりであることは言うまでもない。平時や被災時にかかわりなく人間関係の育みながら、まちづくりに安心安全の機能を高め、生活圏防災や生業防災を図っていく。しかしながらその一方では、政策としてのまちこわし(耐震性不適格に名を借りた破壊)もみられ、その意味ではまちづくりには広範囲な方々との連携をもとに力をつけていくことが肝要かと思う。ここで、まちを丈夫にするための方策として、いくつか項目を思いも含めて列挙する。

- ・被災後、避難所、仮設、本設を同時進行するくらいの総合的なビジョンが必要。
- ・避難計画として、避難所配置や避難経路、周辺に危険となりうる物の対策(例ブロック塀)など。また、避難域の広さや避難期間、避難生活の質など問題が山積。
- ・居住は安全性の高いところに確保はいうまでもないが、必ずしもそうでない地域では防御システムを考えることになる。
- ・まち全体がすっぽり収まる大規模建造物プランが提示されているが、そもそも自然のなかでのまちとしての機能はあるのか。防災の一面のみを優先させてはいないか。
- ・新規や改修などの道路建設、災害防御ライン、延焼防止ラインやゾーンなどの建設は、部分的でなく総合的なものであって欲しい。
- ・防災や減災も短路的方策ではなく街づくりの一環として考える。

3.2 まち壊し まち壊しとして二事象について述べる。

- ・小学校の統廃合；三陸の被災地では小学校の統廃合の事例があるように、過疎化をすすめるまち壊しが、今後増えないようにしたいものである。
- ・文化財クラスの建造物の取り壊し：邪魔者建築と判定が下

ると耐震に不適として取り壊しが多々見られる。

3.3 耐震化 まちづくりについて建物を含めたまちの耐震化をどう図っていくべきか考える。いくつか項目を列挙する。

- ・耐震改修について、画一的な方法の運用だけでいいのかどうか。耐震補強と美観を考えて欲しい。街の景観にそぐわないことも多々あり。
- ・インフラの一つとして下水道について、広域と局所とを併用する何かアイデアで対応できないものか。被災後ずっと仮設トイレの使用では困るのである。
- ・構造家の努力がたりない。もっと構造的なデザインの観点から取り組んで欲しいものである。(頑張っている方も多い)
- ・文化財クラスの建造物の耐震化：目に見えない所に鉄骨補強を施したり、免震装置を接合部に取り付けたりしているが、やはり地震入力量を減らすことを考えるべきである。これには、地盤と基礎の間に免震層を敷く方法がある。この方法については、中越地震で効果があることが分かり、その後の実施例がいくつかある。

4. 教育(防災教育) 当然のこととして、防災はまちあってのものであり、防災教育はまちづくり教育あるいはまちでの営み方の教育そのものである。しかしながら、いわゆる防災教育となると、とかくスキルのみが教育対象になりがちであり、しかも国の方針のまるごと鵜呑みに教育が利用されかねない。例えば、原発問題、放射線がこれだけだから安全ということを理解せよとの強制力が教育に垣間見られる。だからこそ、住民を守るには根本からの教育が言うまでもなく必要となるのである。

防災教育には、もちろん災害時に備えた対処は言うに及ばないが、街という視点が明確でないと「誰のための何のための」があいまいになって、前述のように教育がねじ曲げられ、原発に依存しないという国民世論に背を向けて原発ありきが前提となって、危険負担が合法的に教育を介して押し付けられてしまう。だからこそ、実際の教育では、視点を明確にした上で何をどこまでどのように理解対象とするかを考えることになるのではなかろうか。

教育は、災害をとくに深刻化させる人為的要因に対して、根本を見失わないようにしたい。以下に項目を列挙する。

- ・まちの危険度の把握。改善に向けて。
- ・住民を守る理念と防災システム
- ・家庭内、被害防止に備える。通路の策定、家内避難、野外避難。
- ・避難。避難場所と通路、避難誘導など。

5. 情報について

情報の速やかな公開は当然のこと、情報をどう市民レベルで活用していくべきかもまた問われている。すなわち、情報の解釈とその後の行動について適切な判断力を養うことも考えていきたい。これによって、一部の方々による情報のねじ曲げに毅然として対処していきたいものである。

6. おわりに 日常視点のもとで地域防災もまちづくりを論じた。